

も原先生は、先生宛に送られてきた最初の Draft から H. Hara をあえて訂正しなかったことを覚えている。今後学名の著者名は本書に従うのが適切である。(大場秀章)

□Sivarajan V. V.: **Introduction to the principles of plant taxonomy** Second edition. Edited by N. K. B. Robson. 292pp. 1991. Cambridge University Press, Cambridge. ペーパーバック £15.95 ハードカバー £40.

分類学の基礎を簡素に纏めた教科書である。この一冊があれば分類学の専門用語について、かなりの理解が得られるようよく工夫されている。本書の初版はインドの Calicut 大学の Sivarajan により 1984 年に出版された。この第 2 版もはじめは初版同様にニューデリーの Oxford & IBH から出版されたものである。

本書は、生物分類、taxonomy とその重要性、目的などを述べた第 1 章はじめにから、エビロークまでの 10 の章からなる。原著者の Sivarajan の好みなのか、記述はなかなかこってりしていて、時に理屈が過ぎるくらいを感じた。全体を通覧して、本書が Davis & Heywood の *Principles of Angiosperm Taxonomy* (1963) を基調としていると考えられた。一部に「古代インドの植物科学一瞥」のような部分もあるが、全体を通してこれがインド産の教科書とは思えないほど、インド臭が少ない。それがゆえに汎用の教科書として取り上げられたともいえるが、評者は熱帯圏に住む研究者らしい視点が著者に欠けていることを残念に思う。

この本では、狭義の分類学に力点が置かれているが、しかし幅広く分類学全般の重要事項や概念の紹介も忘れてはいない。分子系統学や種生態学などでの共同研究をはじめとして、ますます窓口が広がりまた細分化が進む今日にあっては、これだけ広く分類学全般に通じることはなかなかむずかしい。その意味では一般読者のみならず研究者にとっても本書は座右に置く手ごろな教科書のひとつといえるだろう。(大場秀章)

□鮫島惇一郎: **北の森の植物たち** 300 pp. 1991.

朝日選書 429. 朝日新聞社 ¥1,200 (+送料)。

著者は、北海道大学、林業試験場北海道支場に勤務した。長年の研究テーマであるエンレイソウでは、美しい図を伴う「エンレイソウ属植物」を出版された。

北海道の植物研究では宮部金吾先生の草創期の後を継いだ館脇操先生を抜かしてはその歴史を語れない。その館脇先生も多くの人にとっては過去の学者となって久しい。ぼう大な論文や雑誌寄稿文を残されたその館脇先生に私淑され、生涯を北海道の植物と森林研究に送られた著者の姿が思い浮かぶ。

本書は、館脇先生が北方林業に連載した「汎針広混交林帯」を基礎にした北海道の森林についての解説から始まる。ここには、先生自身の手になる「北欧雑記」から想像される先生とは別の、日常の先生の側面が活写されている。

次の「エンレイソウ物語」では著者の研究が手際よくまとめられている。これを読んで、私ははじめて森林とエンレイソウの研究が著者にとって体のものであったことが理解できた。

続く第 3, 4 章は北海道に産する樹木や草本について、著者の体験を混じえた随筆といえる。挿入された線画は生き生きとしている。コバコシャジンの正確な図はこれからはじめてだろう。どの植物をとっても興味深い。キタコブシとエゾヤマザクラの関係のように考えさせられることも多い。北海道の植物に興味をもつ方だけでなく、多くの読者に本書を推奨したい。(大場秀章)

□松沢篤郎・青木雅夫: **渡良瀬川支流山塊の植物シダ植物編** 158pp. 1992. 自費出版. ¥2,000 (送料込み)。

著者のひとり、松沢さんはかつて東京大学へ内地留学され、「渡良瀬川支流山塊植物誌」(1965)を出版された。今回、若い協力者を得て本書をまとめられた。

首都圏に接する渡良瀬川支流山塊は林業を主な産業とする地域だが、多くの野生植物がいまだよく残っている。基岩が露出しているなど全般に土壌層が浅いところが多い。この土地的条件を反映してかモンゴリナラ類似のナラがみられるなど植